

担い手が考えるふれあい・いきいきサロンの効果や課題 ーサロン担い手への質問紙調査による分析からー

○長崎ウエスレヤン大学 岩永 耕 (8377)

〔キーワード〕 ふれあい・いきいきサロン, 担い手, 質問紙調査

1. 研究目的

(1) 「つながり」の再構築といきいきサロンの増加

総務省(2017)によれば日本の高齢化率は27.6%に達し、今後もその勢いは衰えそうになく、「介護予防」の重要性がますます高まっている。そのような中で、全国社会福祉協議会が「地域を拠点に住民である当事者とボランティアが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」と定義した「ふれあい・いきいきサロン(以下、「サロン」)」は着実に増えつつある。サロンは市町村社会福祉協議会による関わりもあり、2016年1月時点で67,903箇所 に達しており、このうち高齢者向けのものが約8割を占めている(全社協ら 2016)。

(2) 先行研究と本研究の目的

これまでに、高野(2007)や森(2014)や松井(2014)、豊田(2016)、山村(2013)などがサロンの利用者や代表者・担い手に対して調査研究を行っているが、蓄積できたデータは十分とはいえない。そこで本研究では、近年急速にサロンが増えたA市のサロンの「利用者への効果」や、サロンの「今後の課題」、「今後、望まれるプログラム」などが、「サロンのある地域性」や、担い手の「性別」・「年齢」によって相違があるのかを明らかにし、その要因を検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査対象地域と選定理由

A市を調査対象地域とした。同市は高齢化率が全国のデータと近く、研究で得られた知見を汎用化できる。加えて同市は2005年に市町村合併をした自治体で、市街地と農村部とが混在しているため、市街地と農村部のサロンの比較も可能である。

(2) 調査対象者

A市にある147のサロンの担い手(各サロンから2人)。

(3) 調査項目

① 地域での活動、② サロンに関わる思い、③ 担い手からみた利用者への効果、④ 担い手からみた満足しているサロンの活動、⑤ サロン運営での悩み・困りごと、⑥ サロンの活動・プログラムであればよいと思うもの、等。

(4) 調査方法

2016年6月にA市内の全サロン(147箇所)に調査票を送り回答を依頼した(回収率69.7%)。

(5) 分析方法

まず上記の調査項目ごとに単純集計を行ない、次に「地域性^{注1}」と「(担い手の)性別」「年齢」によって利用者への効果に相違があるかについて、IBM SPSS Statistics22を用いてWilcoxonの順位和検定^{注2}を行なった。そしてこれらの組み合わせのグラフを作成し、「地域性」「性別」「年齢」による相違を分析した。加えて、「地域での活動」「サロン運営での悩み・困りごと」「今後、あればよいと思うプログラム」も同項目で相違があるかを分析し、その要因を考察した。

3. 倫理的配慮

いずれの分析においても日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、調査対象者・地域・団体等の匿名性に配慮をした記述を行なっている。

4. 研究結果

調査データを単純集計した結果、サロンの担い手は60代以下が55%で、75歳未満は77%いた。性別をみると女性が約87%おり、担い手以外にしている地域活動は、「ボランティア」が約4割で、「老人クラブ」も3割近くいた。「サロンに関わる思い」は、「そう思う」が多かった順に「サロンに関わって楽しい(67%)」「地域や社会の役に立てて嬉しい(60%)」「やらねばという義務

感(43%)」であった。また利用者への効果についてたずねたところ、「人と話す機会の増加(82%)」、「安否確認(81%)」、「閉じこもり・孤独死防止(72%)」、「介護予防(58%)」、「新たな友人との出会い(54%)」、「周囲への気遣い・配慮(48%)」、「地域活動の拠点化(44%)」、「自立心の向上(43%)」、「生きがいへの貢献(42%)」、「心配事・悩み事の発見(40%)」の順に多かった。活動について満足・評価している点については、「活動場所」が65%で、約52%が「活動時間」と答えた。次に活動での「悩みごと・困りごと」で最も多かったのは「活動場所(65%)」で、次に多かった順に「活動時間(53%)」、「活動回数(47%)」、「活動内容・プログラム(46%)」、「交流(38%)」であった。活動で「あればよいもの」は、「健康体操・健康チェック」と「認知症予防活動」がどちらも39%で、「レクレーション講座(30%)」、「寝たきり予防活動(24%)」、「趣味・手作り講座(24%)」、「生活・福祉の情報提供(22%)」と続いた。次に「地域性」と「(担い手の)性別」「年齢」の3項目によって、「利用者への効果」に相違があるかについてWilcoxonの順位和検定を行なった結果、「地域性」は「安否確認の効果」、「閉じこもり・孤立防止」、「自立心の向上」に関連があった($p < .05$)。「(担い手の)性別」は「介護予防の効果」と「人と話す機会の増加」に関連があった($p < .05$)。年齢は「心配事・悩みごとの発見」と関連があった($p < .05$)。これらの組み合わせについてグラフを作成し、「地域性」「性別」「年齢」による違いを考察した。加えて、「地域での活動」「運営での悩み」「あればよいと思うプログラム」も同様の項目ごとにグラフを作成し、相違を分析した。その結果、担い手の「地域での活動」を男女別にみると、「自治会役員」は男性が27ポイント多く、「ボランティア」は女性が18ポイント多かった。年齢別にみると、「老人会」は75歳以上が26ポイント多く、民生委員は74歳未満の方が10ポイント多かった。

5. 考察

担い手の多くは前期高齢女性で、担い手以外に男性は自治会の役員をしている人が多かった。このことから男性の担い手は人材が不足しており、担い手をしている男性が自治会役員などの「宛て職」として形式的に引き受けている可能性がある。今後は市社協などがサポートしながら、担い手男性が活躍できるプログラムを各サロンで模索することを提案したい。担い手は、高齢者がサロンを利用することで他者との会話が増え、「閉じこもり・孤独死の防止」や「安否確認」につながっていると感じていた。このことから、担い手は「高齢者がサロンを利用することは介護予防的な効果よりもむしろ、近隣とのネットワーク構築の効果をより評価している」といえよう。その要因は、サロンが介護保険事業所とは違い、住民によって運営されており、利用者宅の近隣で開催されているためではないかと考えた。利用者への効果について地域別にみると、「安否確認」・「閉じこもり・孤立防止」・「自立心向上」のいずれも農村地域にあるサロンの担い手の方が、「利用者への効果がある」と、より多く回答していた。このことから、農村地域は市街地ほど住宅が密集しておらず、民生委員や住民同士の安否確認が市街地ほど十分ではなく、スーパーやバス停が市街地よりも遠いために高齢者が閉じこもりがちになっている可能性がある。また、担い手女性の方が「利用者が他者と話す機会が増えている」と感じているのは、女性利用者の方が他者との会話が増えており、その女性利用者との関わりは担い手女性の方が、より深いためではないかと考えられる。これらについては、今回の調査とは別の「利用者への調査」の結果と見比べる必要があるだろう。

付記

本研究は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所の助成(採択研究2016B1)を受けて実施した調査研究の成果の一部である。

注釈

注1)「地域性」の尺度は「農村」と「市街地」。データはサロン代表者への調査結果のものを用いた。

注2) Wilcoxonの順位和検定とは、名義尺度(2群)と順位尺度との関連を検定する統計分析法。

文献

- 松井順子(2014)「ふれあい・いきいきサロンの有効性と課題に関する考察」『大阪千代田短期大学紀要』43, 82-93。
 森常人(2014)『「ふれあい・いきいきサロン」の参加者評価の分析に関する一考察』『関西外国語大学研究論集』100, 257-270。
 総務省(2017)「人口推計—平成29年5月報—」(<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201705.pdf>, 2017.6.1)
 高野和良ら(2007)「高齢者の社会参加と住民組織 ～ふれあい・いきいきサロン活動に注目して～」『山口県立大学大学院論集』8, 129-137。
 豊田保(2016)「参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義」『新潟医療福祉学会誌』8(2), 16-20。
 山村靖彦(2013)『「ふれあい・いきいきサロン」の支援の指標に関する研究』『別府大学短期大学部紀要』32, 27-41。
 全国社会福祉協議会(2000)『あなたもまちないきいき! 「ふれあい・いきいきサロン」のすすめ』全国社会福祉協議会, 11。
 全国社会福祉協議会・地域福祉委員会・全国ボランティア市民活動振興センター(2016)『社会福祉協議会 活動実態調査等報告書 ボランティア活動年報2015』